

障害理解教育による発達障害に対する態度変容

林 慎吾

（東北大学大学院教育学研究科）

KEY WORDS: 障害理解教育 発達障害 態度変容

（目的）

研究実施者が勤める仙台市では、平成 28 年 4 月より施行した「仙台市障害を理由とする差別をなくし障害のある人もない人も共に暮らしやすいまちをつくる条例」に基づき障害理解促進に取り組んでいる。障害者差別解消条例を検討していた際に、障害による差別が起ってしまう原因の一つとして障害や障害者に対する誤解や偏見があり、差別解消のためには障害理解を促進する研修の実施や啓発が急務の課題となっている。また、発達障害者が一定の割合で存在することが明らかになり、発達障害に対する認知も高まりつつある。しかし、発達障害という言葉聞いたことがあっても、発達障害の症状や対応の在り方について十分に理解している学生は少ないのが現状である。そこで、本研究ではこれまで授業内で大学生を対象に発達障害理解に関する教育を実践してきた先生と共同し、発達障害理解教育が学生の発達障害に対する態度変容にどのような効果があるのかを検証することを目的とする。具体的には、障害理解教育実施前、実施後で発達障害に対する捉え方、顕在的・潜在的態度を測定することでその効果を明らかにする。

（対象）

A 大学に通学する大学生

（方法）

本研究では、発達障害に関する知識・経験、発達障害に対する捉え方、発達障害に対する顕在的・潜在的態度を質問紙法により測定する。発達障害に対する捉え方については、河内(2004)の「障害者観尺度」を用いる。発達障害に対する顕在的態度はSD法(semantic differential method)により測定し、形容詞対については発達障害に対する印象を測定した先行研究である(Takahashi & Haga, 2016)と同様のものを用いる。潜在的態度の測定は、ペーパーベースのIAT(implicit association test)を用い、「良い意味の語」「悪い意味の語」の刺激は先行研究と同様の刺激を用いる(Pruett & Chan, 2006)。IATの実施時間は1ページ当たり10~20秒で、説明も含め6~7分程度の所要時間である。質問紙調査は、障害理解教育実施前(プレ)、障害理解教育実施後(ポスト)、障害理解教育実施後一定時間経過後(フォローアップ)の3回実施する (Fig1)。

研究共同者の授業では15回の授業のうち、2~3回を発達障害理解の授業にあてている。また、授業の別の回では心理アセスメントの手法についても説明を行っている。第1回目のプレ調査は、心理アセスメントの手法について説明する授業において、アセスメントの体験として行う。第2回目のポスト調査は、障害理解教育に関する授業の実施後に行う。第3回目のフォローアップ調査は、障害理解教育を実施し一定時間が経過した後の授業において行う。フォローアップ調査実施後には、プレ調査・ポスト調査で発達障害に関する態度がどのように変容したのかについて結果をフィードバックし、受講生に発達障害に対する理解がどのように深まったのかについて考えてもらう。

（実施に際しての倫理的配慮）

質問紙調査は無記名で行う。調査実施時には調査への協力は任意であること、調査は成績評価とは関係ないことを伝えたくて調査を実施する。なお、本研究は日本教育心理学会倫理綱領に従って行う。

質問紙調査票の一ページ目で調査趣旨、調査への協力が任意であること、調査は成績評価とは関係ないこと、データは匿名化されることを記載し、実施時に口頭で説明する。

質問紙調査には同意が得られた協力者のみが回答するとともに、答えたくない質問については回答する必要がないことを事前に伝える。

（文献）

- ・河内清彦 (2004) 障害学生との交流に関する健常大学生の自己効力感及び障害者観に及ぼす障害条件、対人場面及び個人的要因の影響 教育心理学研究 52(4), 437-447
- ・Takahashi, J., & Haga, A. (2016). Evaluation of Impressions toward People with Intellectual and Developmental Disabilities using the Semantic Differential Method. *International Journal of Humanities and Social Science*, 6, 257-262.
- ・Pruett, S. R., & Chan, F. (2006). The development and psychometric validation of the Disability Attitude Implicit Association Test. *Rehabilitation Psychology*, 51, 202-213.

(HAYASHI Shingo)



Fig1. 研究デザイン